

平成30年5月19日(土)にぎわい交流館AU4F研修室にて、平成30年度、第1回目の放射線安全管理セミナーが行われた。前日の秋田県内を襲った記録的な大雨は、各地で避難勧告が発令される事態になり、会員の参加が上安視されたが、多数の出席がありホッとした思いであった。

加羽委員長の挨拶の後、法花堂 学(市立横手病院)会員が医療被ばく低減施設を増やすために、「みんなで取り組み、職場全体のモチベーションを上げよう！認定施設の取得」と題し発表を開始した。JARTでも医療被ばく低減施設に関してまずは、各県3施設以上の認定を取得して欲しいとされている。しかし、思うように取得がなされてはいない。当県で最初に認定を受け、5年後の更新も行った実績を踏まえ、取得の要領や諸経費等を詳しく説明された。従来と異なり、現在は精度の高い、被ばく線量推定ソフト(PCXMC、ImPACT等)が開発されている。そのため、必ずしも線量計を有していなくても、申請ができるようになってきている事は、認定への金銭的なハードルを少し低くしてくれたように思われた。ともあれ、必要なのは会員のやる気であり、認定への作業を分担することで負担が軽減されるとも提案された。

次に工藤 和也(市立秋田総合病院)会員から近年継続研究されているCT関連から、「同一ファントムを用いた調査結果から、CTの画像と被ばくを考えよう！」と題し発表がなされた。昨年、県内多数の稼働CT装置に対して、長期に渡った調査分析がされ、被ばく状況と画質評価が提示された。各施設の診療特徴もあろうが、DRLs値を上回る線量での撮影施設もあった。しかし、各施設が、概ねDRLsを鑑みた設定をして、撮影をして画質を担保しているようにも感じさせるものであった。

休憩を挟み、「どうしていますか？放射線診療における安全管理のギモンを考えよう」とし、3施設から発表がなされた。鈴木 準(北秋田市民病院)会員からは「①介助者の防護について」であった。撮影の際、エックス線照射・患者さんの関係の中で、脇で介助する者の立ち位置を考慮するだけで、介助者の被ばく線量を低減できる事が実験により示された。

小林 林太郎(大曲厚生医療センター)会員からの「②被験者の防護について」では、従来から問題視されている、女性生殖器の防護についての発表がなされた。婦人科医師、男性診療放射線技師ばかりでなく、大勢の女性職員などの幅広い意見や考えを集約して、方向性を見出したものであった。しっかりと検査部位のみに照射野を絞り込み、撮影することで、鉛の腰巻きや遮蔽板は必要がないこと。ファントムを使用した実験からは、鉛腰巻きなどを使用することでかえって、下腹部の臓器線量が微量だが上昇するとの結果を受けた。

野呂 和香菜(市立角館総合病院)会員の「③作業従事者の防護について」では、血管撮影室の透視・撮影時の室内の線量を測定し、空間線量分布図を作成、提示することにより、スタッフに被ばくや防護に関心を持ってもらうことができた。また、医師からは被ばく低減のため、今後は透視時の照射装置の角度設定を変更するなど、積

極的な行動も引き出せたとも言う。

発表後に行われた、「全部まとめて質疑応答・ディスカッションしよう！《では、佐藤均(秋田厚生医療センター)会員及び湯瀬 直樹(北秋田市民病院)会員の司会の下、活発な意見交換が行われた。放射線被ばくや防護にもっと関心をもってもらうためには、当該施設が作成した空間線量分布図を利用して、啓蒙を図る事が施設職員にとって分かりやすく、展開しやすいであろうとされた。また、女性生殖器の防護に関しては、既存の思い違いをいきなり否定することは、混乱を招くため、まずは正しい知識を診療放射線技師が受け入れなければならない。次に社会がこれを受け入れるように、急変は避けながらも、問題を緩やかに解決できるように構築するべきではないかと思われた。

今回のセミナーは、どの発表も実験や研究がしっかりとなされていて、充実した内容であった。大変有意義な発表を下された発表者には心より感謝申し上げたい。

記 齊藤 龍

晴



